「日々の理科」（第 436 号） 2015（H27),-9,12

「多年生のキノコ」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

キノコは、菌類が地下に広げた菌糸束が作った「子実体」のうち、目に見える大きさのものを言う。子実体は、胞子を拡散させる為だけのものだから、大抵は短命に終わる。中にはヒトヨタケ（一夜茸）の仲間のように、わずか一晩で、自らを溶かして胞子を流出させる種類もある。

「ササクレヒトヨタケ」*Coprinus comatus*
わずか一晩で傘を自己溶解させて、雨で胞子を流して拡散させる。溶けていないものは食用。（北軽井沢）

ところが、キノコとしては、非常に長寿の種類も存在する。サルノコシカケの仲間も、長寿キノコに該当する。サルノコシカケの仲間のキノコは、１週間や１か月どころではなく、多年生のものも存在する。枯れた樹木に発生するものが多いが、中には生きた樹木につく、厄介ものもある。針葉樹につくものでは「ツガサルノコシカケ」（栂猿の腰掛）、広葉樹では「コフキサルノコシカケ」を、一番よく見かける。

キノコ全体が、粉をかぶったように見えるので、「こふき（粉噴き）」なのだ。この「粉」は胞子である、と説明される。確かに、いくつも重なって発生している、下部のキノコには、粉がたくさん積もっている。

「コフキサルノコシカケ」*Ganoderma applanayum*
ソメイヨシノの古木の根元で見つけた。３個体重なった一番下。かつてはサルノコシカケ科だったが、現在はマンネンタケ科に分類されている。（教育の森公園）

サルノコシカケの仲間は、多年生であるから、季節による成長のちがいで、樹木と同じように年輪が見られることがある。上の写真でも、同心円状の筋があるのがわかる。全体に木質で非常に堅く、靴で蹴ってもとれないこともある。傘の裏側に、胞子をつくる「管孔」がたくさん開いている。私は、このキノコに猿が座っているところを、まだ見たことがない。写真がないので、想像図を描いてみた。